(19)日本国特許庁(JP)　(12)公開特許公報(A)　(11)特許出願公開番号
特開2014-176751
(P2014-176751A)
(43)公開日　平成26年9月25日(2014.9.25)

(51)Int.Cl.		F I			テーマコード（参考）
A47J 31/14	(2006.01)	A47J	31/14	A	3B001
A47G 19/14	(2006.01)	A47G	19/14	D	4B104

審査請求 有　請求項の数 4　ＯＬ　（全 15 頁）

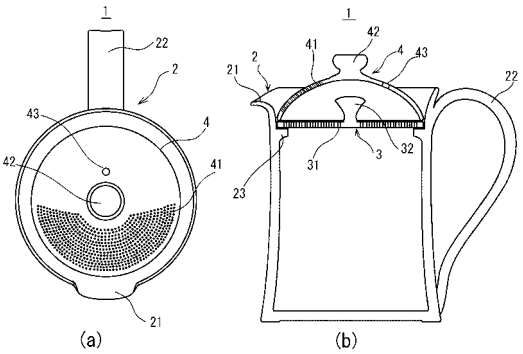
(21)出願番号　特願2014-122644 (P2014-122644)
(22)出願日　平成26年6月13日 (2014.6.13)
(62)分割の表示　特願2010-190896 (P2010-190896)の分割
原出願日　平成22年8月27日 (2010.8.27)
(31)優先権主張番号　特願2010-94415 (P2010-94415)
(32)優先日　平成22年4月15日 (2010.4.15)
(33)優先権主張国　日本国(JP)

(71)出願人　309012063
小西　啓吾
滋賀県甲賀市信楽町勅旨１６７５－２　紫香陶房
(74)代理人　100121337
弁理士　藤河　恒生
(72)発明者　小西　啓吾
滋賀県甲賀市信楽町勅旨１６７５－２

Ｆターム(参考)　3B001 AA21 BB01 BB04 DB02 DC10
4B104 AA09 BA57 EA14 EA19 EA25

(54)【発明の名称】飲料用ポット

(57)【要約】
【課題】容易かつ迅速にコーヒーを淹れることができ、しかも、コーヒー滓の混入阻止に優れた飲料用ポットを提供する。
【解決手段】この飲料用ポット１は、上方が開口し、その周縁の一部に外方に突出した注ぎ口２１が形成されたポット本体２と、多数の貫通した第１通液孔３１、３１、…が形成されており、注ぎ口２１よりも下方に載置されてポット本体２の開口を塞ぐ中蓋３と、大略椀状をなし、中蓋３上に載置されてこれを覆うものであって、注ぎ口２１側になる部分に中蓋３の第１通液孔第１通液孔３１、３１、…よりも直径が小さい多数の貫通した第２通液孔４１、４１、…が形成された外蓋４と、を備えてなる。
【選択図】図２



【特許請求の範囲】
【請求項１】
上方が開口し、その周縁の一部に外方に突出した注ぎ口が形成されたポット本体と、
多数の貫通した第１通液孔が形成されており、前記注ぎ口よりも下方に載置されてポット本体の開口を塞ぐ中蓋と、
大略椀状をなし、中蓋上に載置されてこれを覆うものであって、前記注ぎ口側になる部分に多数の貫通した第２通液孔が形成された外蓋と、
を備えてなることを特徴とする飲料用ポット。
【請求項２】
請求項１に記載の飲料用ポットにおいて、
前記第２通液孔は、前記第１通液孔よりも直径が小さいことを特徴とする飲料用ポット。
【請求項３】
請求項１又は２記載の飲料用ポットにおいて、
前記外蓋は、前記注ぎ口側になる周縁に複数の切欠きが形成されていることを特徴とする飲料用ポット。
【請求項４】
請求項１～３のいずれか１項に記載の飲料用ポットにおいて、
前記中蓋は、多数の第１通液孔が中蓋の略全体にわたって形成されていることを特徴とする飲料用ポット。
【請求項５】
請求項１～３のいずれか１項に記載の飲料用ポットにおいて、
前記中蓋に代えて、ポット本体に、前記注ぎ口よりも下方の内壁に、多数の貫通した第１通液孔が形成された障壁部が設けられていることを特徴とする飲料用ポット。
【発明の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
本発明は、コーヒー用に好適な飲料用ポットに関する。
【背景技術】
【０００２】
従来より、わが国では、コーヒーの淹れ方として、いわゆるペーパドリップ方式やサイフォン方式などが普及している。これらは、コーヒー粉に湯を接触させることによりその中の成分を抽出しペーパーフィルタなどで濾過するものである。それ以外の方法としては、コーヒー粉を飲料用ポットに入れて上澄み液をカップに移すものがある。その中で、いわゆるトルココーヒー方式は、水を注入して煮沸するものであり、いわゆるコーヒープレス方式は、湯を注入し、直立した柄の付いたフィルタ部材によりコーヒー滓を底面に押し留めるものである（例えば、特許文献１、２）。
【先行技術文献】
【特許文献】
【０００３】
【特許文献１】実開昭６３－１８１３６３号公報
【特許文献２】特表２００７－５１６７８６号公報
【発明の概要】
【発明が解決しようとする課題】
【０００４】
このように、コーヒーの淹れ方には様々な方法が存在しており、淹れ方によって味覚も異なるので、人それぞれの嗜好や習慣などによりその方法が選択される。前述した方法において、ペーパドリップ方式やサイフォン方式は、ペーパーフィルタをセットするなど、淹れる作業が煩雑であり、迅速に行うのが容易ではなく、維持費もかさむ傾向にある。また、トルココーヒー方式やコーヒープレス方式のように上澄み液を用いるものは、コーヒ

ー滓を混入しないようにするのが、通常、容易ではない。
【０００５】
本発明は係る事由に鑑みてなされたものであり、その目的は、容易かつ迅速にコーヒーを淹れることができ、しかも、コーヒー滓の混入阻止に優れた飲料用ポットを提供することにある。
【課題を解決するための手段】
【０００６】
上記目的を達成するために、請求項１に記載の飲料用ポットは、上方が開口し、その周縁の一部に外方に突出した注ぎ口が形成されたポット本体と、多数の貫通した第１通液孔が形成されており、前記注ぎ口よりも下方に載置されてポット本体の開口を塞ぐ中蓋と、大略椀状をなし、中蓋上に載置されてこれを覆うものであって、前記注ぎ口側になる部分に多数の貫通した第２通液孔が形成された外蓋と、を備えてなることを特徴とする。
【０００７】
請求項２に記載の飲料用ポットは、請求項１に記載の飲料用ポットにおいて、前記第２通液孔は、前記第１通液孔よりも直径が小さいことを特徴とする。
【０００８】
請求項３に記載の飲料用ポットは、請求項１又は２記載の飲料用ポットにおいて、前記外蓋は、前記注ぎ口側になる周縁に複数の切欠きが形成されていることを特徴とする。
【０００９】
請求項４に記載の飲料用ポットは、請求項１～３のいずれか１項に記載の飲料用ポットにおいて、前記中蓋は、多数の第１通液孔が中蓋の略全体にわたって形成されていることを特徴とする。
【００１０】
請求項５に記載の飲料用ポットは、請求項１～３のいずれか１項に記載の飲料用ポットにおいて、前記中蓋に代えて、ポット本体に、前記注ぎ口よりも下方の内壁に、多数の貫通した第１通液孔が形成された障壁部が設けられていることを特徴とする。
【発明の効果】
【００１１】
本発明の飲料用ポットによれば、コーヒー粉を入れたポット本体に湯を注入することによりコーヒー粉の成分を抽出し、外蓋を手で押さえることにより中蓋をポット本体に密着させ、飲料用ポットを傾けることにより、ポット本体の中のコーヒー成分抽出液を中蓋の多数の第１通液孔を通過させ、更に外蓋の多数の第２通液孔を通過させて、容易かつ迅速に、コーヒー滓の混入が極めて少ないコーヒー成分抽出液を注ぎ口から流出させることができる。
【図面の簡単な説明】
【００１２】
【図１】本発明の第１の実施形態に係る飲料用ポット１を示すものであって、（ａ）が正面図、（ｂ）が右側面図である。
【図２】同上の飲料用ポット１を示すものであって、（ａ）が平面図、（ｂ）が右側面視断面図である。
【図３】同上の飲料用ポット１の構成を示す正面図であって、（ａ）が外蓋４、（ｂ）が中蓋３である。
【図４】同上の飲料用ポット１の構成を示す右側面図であって、（ａ）が外蓋４、（ｂ）が中蓋３である。
【図５】同上の飲料用ポット１の構成を示す平面図であって、（ａ）が外蓋４、（ｂ）が中蓋３、（ｃ）がポット本体２である。
【図６】同上の飲料用ポット１の中蓋３の変形例の平面図である。
【図７】同上の飲料用ポット１の中蓋３と外蓋４の一部の拡大平面図であって、（ａ）が外蓋４（図５（ａ）の範囲Ａ－Ａ’間のＡ’’－Ａ’’’）、（ｂ）が中蓋３（図５（ｂ）の範囲Ｂ－Ｂ’間のＢ’’－Ｂ’’’）である。

【図８】同上の飲料用ポット１の外蓋４の変形例を示すものであって、（ａ）が側面図、（ｂ）が底面図、（ｃ）が周縁の一部の拡大底面図である。
【図９】同上の飲料用ポット１の使用例を示すものであって、コーヒーを淹れた後の外蓋４の裏面の様子を示すものである。
【図１０】本発明の第２の実施形態に係る飲料用ポット５を示すものであって、（ａ）がポット本体２’の平面図、（ｂ）が飲料用ポット５の右側面視断面図である。
【発明を実施するための形態】
【００１３】
以下、本発明を実施するための好ましい形態について図面を参照しながら説明する。本発明の第１の実施形態に係る飲料用ポット１は、図１～図５に示すように、ポット本体２と中蓋３と外蓋４を備えてなる。
【００１４】
ポット本体２は、上方が開口し、その周縁の一部に外方に突出した注ぎ口２１が形成されている。より詳細には、ポット本体２は、飲料用ポット１がテーブルなどに置かれたときに安定するように、その底面の周辺部は平らであり、注ぎ口２１の反対側には外方に突出した取っ手２２が形成されている。ポット本体２の注ぎ口２１の先端部よりも下方の内壁には、中蓋３を載置するための段差部２３が形成されている。注ぎ口２１は、正面視略Ｕ字形状（図１（ａ）参照。）のように上方が空いているものが注ぎ易さや洗浄のし易さの点で好ましい。
【００１５】
中蓋３は、略全体にわたって多数の貫通した第１通液孔３１、３１、…が形成されており（図５（ｂ）参照。）、ポット本体２の注ぎ口２１よりも下方に載置されてポット本体２の開口を塞ぐものである。より詳細には、中蓋３は、略平板状の中蓋基部３ａと、その中心部に上方に突出して形成された突起部３２と、より成り、多数の第１通液孔３１、３１、…が突起部３２の周囲の略全体に形成されている。多数の第１通液孔３１、３１、…は、同じ直径として形成されており、後述のようにコーヒー成分抽出液を注ぎ口２１から流出させるときに、流出が遅くならなく、かつ、コーヒー滓の大部分が中蓋基部３ａにより遮断されるような直径（例えば１．０ｍｍ～１．２ｍｍ程度）となっている。第１通液孔３１、３１、…の直径は、通常、第１通液孔３１、３１、…相互間の距離よりも小さくする。突起部３２の高さは、外蓋４が中蓋３の上に載置されたときに、外蓋４の周縁が中蓋３に接するのに妨げとならないような高さとする。中蓋３は、ポット本体２の段差部２３に載置されることによってポット本体２の開口を塞ぐ。
【００１６】
中蓋３は、図６に示すように、中蓋３がポット本体２に載置されたとき取っ手２２側になる部分に第１通液孔３１、３１、…を形成しないようにすることも可能であるが、ポット本体２に略満杯に湯が注入された場合に取っ手２２側の第１通液孔３１、３１、…から空気を流入させ易い点、及び回転位置合わせが必要ない点で、図５（ｂ）に示すように略全体にわたって形成されているのが好ましい。
【００１７】
外蓋４は、大略椀状をなし、ポット本体２に載置された中蓋３上に更に載置されてこれを覆うものであって、そのように載置されたとき注ぎ口２１側になる部分に多数の貫通した第２通液孔４１、４１、…が形成されている。この第２通液孔４１、４１、…は、図７に示すように、中蓋３の第１通液孔３１、３１、…よりも直径が小さい。また、外蓋４は、中蓋３の上に載置されたときにそれらの間に空間を形成するようになっている。
【００１８】
より詳細には、外蓋４は、中蓋３に周縁が接することができるように大略椀状をなす外蓋基部４ａと、その中心部に上方に突出して形成された突起部４２と、より成り、多数の第２通液孔４１、４１、…が注ぎ口２１側に位置し得るように形成されている。多数の第２通液孔４１、４１、…は、同じ直径として形成されており、後述のようにコーヒー成分抽出液を注ぎ口２１から流出させるときに、中蓋３の多数の第１通液孔３１、３１、…を

通過したコーヒー成分抽出液に分散して混じっている少量のコーヒー滓がほとんど外蓋基部４ａにより遮断されるような直径（例えば０．８ｍｍ程度）となっている。また、そのときに、コーヒー成分抽出液がスムーズに流出するように、全体の約半分程度の範囲に第２通液孔４１、４１、…が多数形成されている。

【００１９】

外蓋基部４ａは、中蓋３の間に空間を形成するよう中心部に近付くにつれて上方に湾曲することにより大略椀状をなしている。また、外蓋基部４ａの第２通液孔４１、４１、…が形成されていない部分には、空気孔４３が形成されている。この空気孔４３は、通常、使用時にはコーヒー成分抽出液が到達することはないので、第２通液孔４１よりも大きい直径であり、また、１個に限ることなく複数にすることが可能である。このように、外蓋４（外蓋基部４ａ）が大略椀状をなしているので、第２通液孔４１、４１、…を多数形成できる上に、空気孔４３も形成可能になっている。

【００２０】

突起部４２は、その上面を平らにして、ひっくり返してテーブルなどに置くことができるようにするのが好ましい。その状態で、ポット本体２から取り外した中蓋３を上に（外蓋４の底面上に）載置できるので、衛生的である。

【００２１】

また、外蓋４は、図８に示すように、ポット本体２と中蓋３上に載置されたとき注ぎ口２１側になる周縁（外蓋基部４ａの周縁）に複数の切欠き４４、４４、…を形成することも可能である。このようにすると、後述のようにコーヒー成分抽出液を注ぎ口２１から流出させるときに、外蓋４と中蓋３の間に形成された空間に溜まったコーヒー成分抽出液を複数の切欠き４４、４４、…から流出させて、外蓋４が水圧により不如意に持ち上がるのを抑止することができる。切欠き４４、４４、…は、コーヒー滓が流出しない大きさとする。

【００２２】

ポット本体２と中蓋３と外蓋４は、陶磁器製であるのが好ましい。陶磁器製であると、断熱性に優れた材料を用いることができるため、コーヒー成分抽出の待機の期間などにポット本体２に注いだ湯が冷めにくくすることができ、また、製法上、第１通液孔３１や第２通液孔４１を形成するのが容易である。また、金属やプラスチックを用いる必要がないので、金属アレルギーや化学物質アレルギーの人或いはそれらに敏感な人にとっては非常に有用なものとなる。なお、ここで陶磁器製とはセラミック製をも含む。

【００２３】

このような飲料用ポット１は、以下のようにして使用することができる。先ず、外蓋４と中蓋３をそれぞれの突起部４２、３２を持ってポット本体２から取り外し、ポット本体２にコーヒー粉を入れ、湯を注入する。そして、中蓋３をポット本体２の段差部２３に載置し、外蓋４をその周縁を中蓋３に接しさせて中蓋３上に載置する。コーヒー粉の成分が湯、すなわちコーヒー成分抽出液の中に抽出されるので、それが適当な濃度になるまで待機する。好ましくは、この待機時間の途中に、コーヒー成分抽出液をかき廻して表面付近に浮き上がったコーヒー滓の軽いものを沈める。この場合、沈んだコーヒー滓の軽いものは、時間が経つと再度浮き上がるので、浮き上がる前（例えば、かき廻してから３０秒～６０秒程度経つ前）に次に述べるようなカップにコーヒー成分抽出液を注ぐ工程にはいることになる。

【００２４】

この待機時間の後、取っ手２２を持ち、外蓋４の突起部４２を手で押さえて外蓋４を中蓋に、中蓋３をポット本体２（段差部２３）にそれぞれ密着させ、飲料用ポット１をカップに向けて傾ける。そうすると、ポット本体２の中のコーヒー成分抽出液は、中蓋３の多数の第１通液孔３１、３１、…を適度な速度で通過する。このとき、コーヒー成分抽出液に分散して混じっていたコーヒー滓の大部分は中蓋３に遮断される。注ぎ口２１側の第１通液孔３１、３１、…は、次第にコーヒー滓により塞がれていき、塞がれた以外の第１通液孔３１、３１、…をコーヒー成分抽出液が通過するようになる。コーヒー成分抽出液が

通過しない第１通液孔３１、３１、…は、ポット本体２の中で流出するコーヒー成分抽出液に入れ替わる空気の供給孔となる。

【００２５】

中蓋３の多数の第１通液孔３１、３１、…を通過したコーヒー成分抽出液は、外蓋４と中蓋３の間に形成された空間に溜まりながら、外蓋４の多数の第２通液孔４１、４１、…を通過して流出する。このとき、中蓋３の多数の第１通液孔３１、３１、…を通過したコーヒー成分抽出液には、少量のコーヒー滓が分散して混じっており、それらのほとんどは、外蓋４に遮断されることになる。また、混じっているコーヒー滓が少量であるので、第２通液孔４１、４１、…の大部分が塞がれてコーヒー成分抽出液の流出速度が遅くなることはなく、また、その結果、コーヒー成分抽出液が濃くなって苦くなることもない。外蓋４の多数の第２通液孔４１、４１、…から流出したコーヒー成分抽出液は、外蓋４の外面を伝い、そして外蓋４の外面とポット本体２の内壁により誘導されて、注ぎ口２１に向かって流れて行く。

【００２６】

このようにして、容易かつ迅速に、コーヒー滓の混入が極めて少ないコーヒー成分抽出液を注ぎ口２１から流出させることができる。使用後の飲料用ポット１は、ポット本体２と中蓋３と外蓋４を分離して洗浄する。第１通液孔３１、３１、…と第２通液孔４１、４１、…に詰まったコーヒー滓は水道栓からの水圧により取り除くことができ、また、飲料用ポット１には人間の手や洗浄具が届きにくい箇所はないので、非常に簡単に洗浄でき、衛生的である。また、飲料用ポット１の構成は簡単で、かつ、摺動などする部分がないため、劣化はほとんどないようにすることができる。

【００２７】

使用例として、図９に、第１通液孔３１、３１、…の直径が１．２ｍｍ程度、第２通液孔４１、４１、…の直径が０．８ｍｍ程度であり、外蓋４には切欠き４４、４４、…が形成された飲料用ポット１を用い、コーヒー粉としてスプーン４杯分の粗挽きを用いたときのコーヒーを淹れた後の外蓋４の裏面の様子を示している。このように、中蓋３の第１通液孔３１、３１、…を通過したときにコーヒー成分抽出液に混じっていたコーヒー滓が外蓋４により十分に遮断されており、注ぎ口２１からはコーヒー滓の混入が極めて少ないコーヒー成分抽出液を得ることができた。

【００２８】

次に、本発明の第２の実施形態に係る飲料用ポット５について説明する。この飲料用ポット５は、図１０（ｂ）に示すように、ポット本体２’と外蓋４を備えてなる。ポット本体２’には、上述の飲料用ポット１を構成していた中蓋３に代えて、障壁部２４が設けられている。外蓋４は、飲料用ポット１を構成していた外蓋４と同様のものである。従って、飲料用ポット５全体の外観は、飲料用ポット１と同様、すなわち図１（ａ）の正面図、図１（ｂ）の右側面図、図２（ａ）の平面図と同様である。また、外蓋４の外観は、図３（ａ）の正面図、図４（ａ）の右側面図と同様である。

【００２９】

より詳細には、ポット本体２’は、ポット本体２と同様の注ぎ口２１と取っ手２２が形成されている。また、ポット本体２’の上記障壁部２４は、飲料用ポット１の中蓋３及びポット本体２の段差部２３のかわりに、注ぎ口２１の先端部よりも下方の内壁に、ポット本体２’の一部として形成されている。障壁部２４は、取っ手２２側に、それを通してコーヒー粉を入れ湯を注入することができる大孔２５が形成されており、この大孔２５よりも注ぎ口２１側に、上記中蓋３の第１通液孔３１、３１、…と同様な第１通液孔２６、２６、…が形成されている（図１０（ａ）参照）。

【００３０】

この飲料用ポット５は、中蓋３を用いないので、飲料用ポット１よりも洗浄や保管がし易い。但し、ポット本体２’に略満杯に湯が注入された場合などに、大孔２５をコーヒー成分抽出液が通過しないようにしてカップに注ぐ必要がある。

【００３１】

以上、本発明の実施形態である飲料用ポット１について説明したが、本発明は、実施形態に記載したものに限られることなく、特許請求の範囲に記載した事項の範囲内でのさまざまな設計変更が可能である。例えば、第１通液孔３１（又は２６）と第２通液孔４１の直径は、適切なコーヒー成分抽出液が得られるように、適宜、設計変更することが可能である。

【００３２】

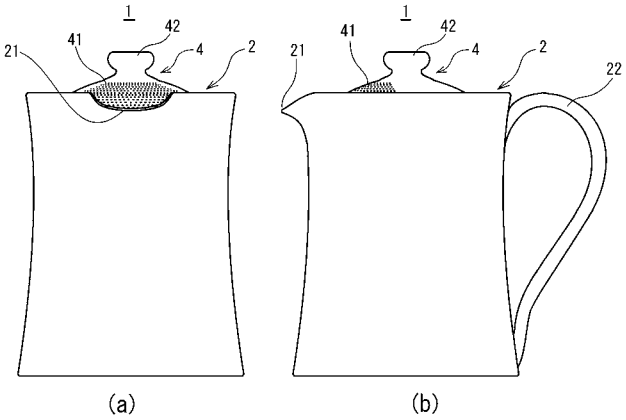
また、本発明の飲料用ポットをコーヒーのみならず、他の飲料に流用することは任意であり、そのために適宜、設計変更することも可能である。例えば、紅茶用や緑茶用などに流用できるのは勿論であるが、それらを氷で冷やす場合に非常に有効である。この場合、茶葉を入れ、湯又は水を注入した飲料用ポット１（又は５）に氷を入れる。そして、茶葉及び氷を中蓋３（又は障壁部２４）で遮断して、茶成分抽出液をカップに注ぐ。ここで、茶葉及び氷を中蓋３で遮断して茶成分抽出液を一気に注ぐことができる点で、飲料用ポット１の方が特に好ましい。また、コーヒーに使用するとコーヒー滓の混入が増えるが、紅茶や緑茶などに主に使用するのならば、茶葉はコーヒー滓ほどには小さくなく中蓋３（又は障壁部２４）で十分に遮断されるので、流出量を増やして一気に注ぎ易いように、第２通液孔４１の直径を第１通液孔３１（又は２６）と同等或いはそれよりも大きく（例えば１．６ｍｍ～２．０ｍｍ程度に）してもよい。

【符号の説明】

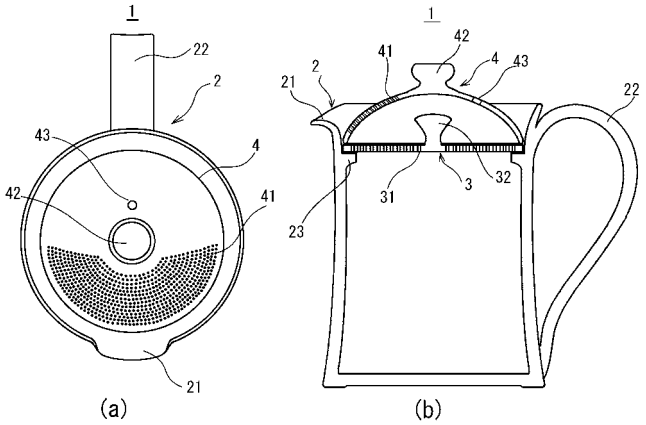
【００３３】

１、５　飲料用ポット
２　ポット本体
２１　注ぎ口
２４　障壁部
３　中蓋
３１、２６　第１通液孔
４　外蓋
４１　第２通液孔
４４　外蓋４の切欠き

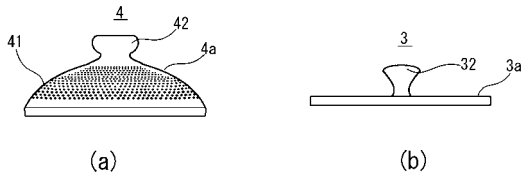
【図１】


1
42
41
4
2
21
22
(a)
(b)

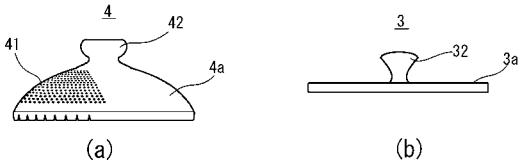
【図２】


1
22
2
43
4
42
41
21
(a)
1
42
41
4
43
2
21
22
31
3
32
23
(b)

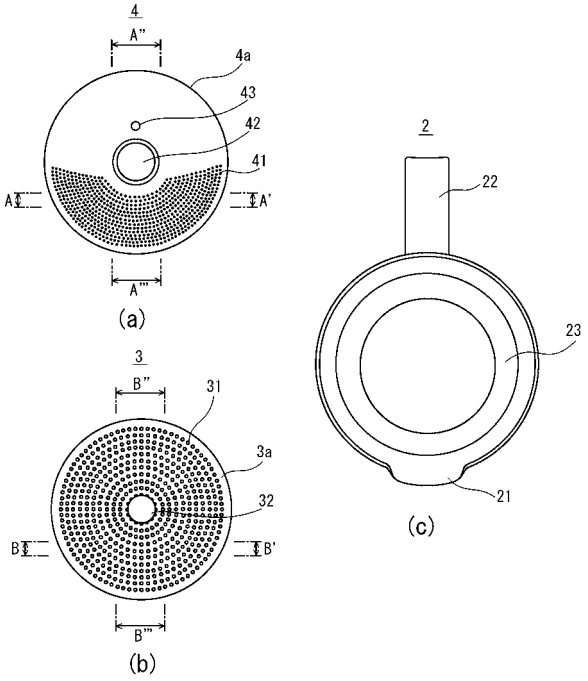
【図３】


4
42
41
4a
(a)
3
32
3a
(b)

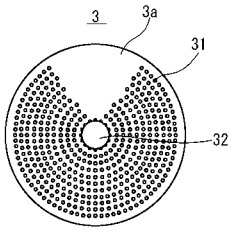
【図４】


4
42
41
4a
(a)
3
32
3a
(b)

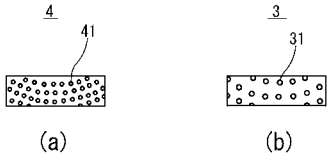
【図５】


4
A"
4a
43
42
41
A
A'
A'"
(a)
3
B"
31
3a
32
B
B'
B'"
(b)
2
22
23
21
(c)

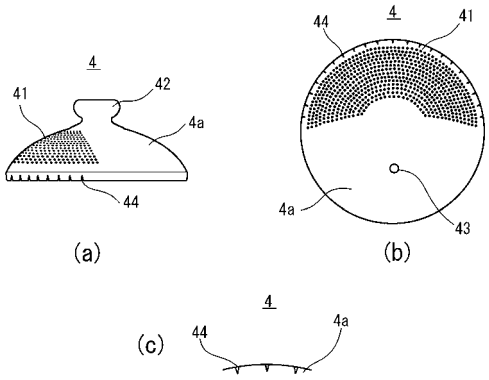
【図６】



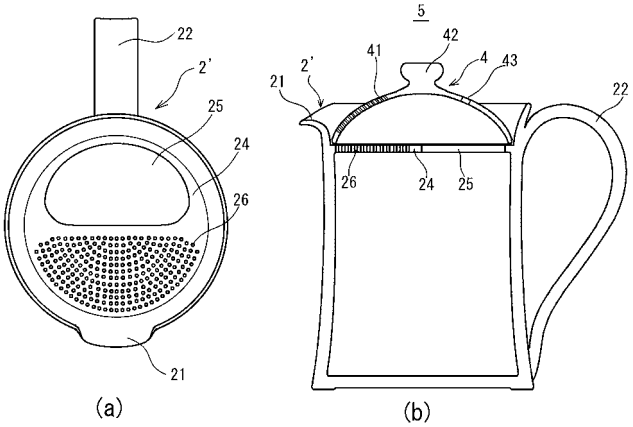
【図７】



【図８】



【図１０】



【図９】



【手続補正書】
【提出日】平成26年7月7日(2014.7.7)
【手続補正１】
【補正対象書類名】特許請求の範囲
【補正対象項目名】全文
【補正方法】変更
【補正の内容】

【特許請求の範囲】
【請求項１】
上方が開口し、その周縁の一部に外方に突出した注ぎ口が形成されたポット本体と、
多数の貫通した第１通液孔が形成されており、前記注ぎ口よりも下方に載置されてポット本体の開口を塞ぐ中蓋と、
大略椀状をなし、中蓋上に載置されてこれを覆うものであって、前記注ぎ口側になる部分に多数の貫通した第２通液孔が形成された外蓋と、
を備えてなり、
前記第２通液孔は、前記第１通液孔よりも直径が小さいことを特徴とする飲料用ポット（紅茶用に限る）。
【請求項２】
請求項１に記載の飲料用ポットにおいて、
前記外蓋は、前記注ぎ口側になる周縁に複数の切欠きが形成されていることを特徴とする飲料用ポット。
【請求項３】
請求項１又は２に記載の飲料用ポットにおいて、
前記中蓋は、多数の第１通液孔が中蓋の略全体にわたって形成されていることを特徴とする飲料用ポット。
【請求項４】
請求項１又は２に記載の飲料用ポットにおいて、
前記中蓋に代えて、ポット本体に、前記注ぎ口よりも下方の内壁に、多数の貫通した第１通液孔が形成された障壁部が設けられていることを特徴とする飲料用ポット。
【手続補正２】
【補正対象書類名】明細書
【補正対象項目名】全文
【補正方法】変更
【補正の内容】
【発明の詳細な説明】
【技術分野】
【０００１】
本発明は、コーヒー用又は紅茶用などの飲料用ポットに関する。
【背景技術】
【０００２】
従来より、わが国では、コーヒーの淹れ方として、いわゆるペーパドリップ方式やサイフォン方式などが普及している。これらは、コーヒー粉に湯を接触させることによりその中の成分を抽出しペーパーフィルタなどで濾過するものである。それ以外の方法としては、コーヒー粉を飲料用ポットに入れて上澄み液をカップに移すものがある。その中で、いわゆるトルココーヒー方式は、水を注入して煮沸するものであり、いわゆるコーヒープレス方式は、湯を注入し、直立した柄の付いたフィルタ部材によりコーヒー滓を底面に押し留めるものである（例えば、特許文献１、２）。
【先行技術文献】
【特許文献】
【０００３】
【特許文献１】実開昭６３－１８１３６３号公報
【特許文献２】特表２００７－５１６７８６号公報
【発明の概要】
【発明が解決しようとする課題】
【０００４】
このように、コーヒーの淹れ方には様々な方法が存在しており、淹れ方によって味覚も異なるので、人それぞれの嗜好や習慣などによりその方法が選択される。前述した方法に

おいて、ペーパドリップ方式やサイフォン方式は、ペーパーフィルタをセットするなど、淹れる作業が煩雑であり、迅速に行うのが容易ではなく、維持費もかさむ傾向にある。また、トルココーヒー方式やコーヒープレス方式のように上澄み液を用いるものは、コーヒー滓を混入しないようにするのが、通常、容易ではない。

【０００５】

本発明は係る事由に鑑みてなされたものであり、その目的は、容易かつ迅速にコーヒー又は紅茶などを淹れることができ、しかも、滓の混入阻止に優れた飲料用ポット提供することにある。

【課題を解決するための手段】

【０００６】

上記目的を達成するために、請求項１に記載の飲料用ポットは、上方が開口し、その周縁の一部に外方に突出した注ぎ口が形成されたポット本体と、多数の貫通した第１通液孔が形成されており、前記注ぎ口よりも下方に載置されてポット本体の開口を塞ぐ中蓋と、大略椀状をなし、中蓋上に載置されてこれを覆うものであって、前記注ぎ口側になる部分に多数の貫通した第２通液孔が形成された外蓋と、を備えてなり、前記第２通液孔は、前記第１通液孔よりも直径が小さいことを特徴とすることを特徴とする。

【０００７】

請求項２に記載の飲料用ポットは、請求項１に記載の飲料用ポットにおいて、前記外蓋は、前記注ぎ口側になる周縁に複数の切欠きが形成されていることを特徴とする。

【０００８】

請求項３に記載の飲料用ポットは、請求項１又は２に記載の飲料用ポットにおいて、前記中蓋は、多数の第１通液孔が中蓋の略全体にわたって形成されていることを特徴とする。

【０００９】

請求項４に記載の飲料用ポットは、請求項１又は２に記載の飲料用ポットにおいて、前記中蓋に代えて、ポット本体に、前記注ぎ口よりも下方の内壁に、多数の貫通した第１通液孔が形成された障壁部が設けられていることを特徴とする。

【発明の効果】

【００１０】

本発明の飲料用ポットによれば、ポット本体の中のコーヒー成分抽出液又は茶成分抽出液を中蓋の多数の第１通液孔を通過させ、更に外蓋の多数の第２通液孔を通過させて、容易かつ迅速に、滓の混入が極めて少ないコーヒー成分抽出液又は茶成分抽出液を注ぎ口から流出させることができる。

【図面の簡単な説明】

【００１１】

【図１】本発明の第１の実施形態に係る飲料用ポット１を示すものであって、（ａ）が正面図、（ｂ）が右側面図である。

【図２】同上の飲料用ポット１を示すものであって、（ａ）が平面図、（ｂ）が右側面視断面図である。

【図３】同上の飲料用ポット１の構成を示す正面図であって、（ａ）が外蓋４、（ｂ）が中蓋３である。

【図４】同上の飲料用ポット１の構成を示す右側面図であって、（ａ）が外蓋４、（ｂ）が中蓋３である。

【図５】同上の飲料用ポット１の構成を示す平面図であって、（ａ）が外蓋４、（ｂ）が中蓋３、（ｃ）がポット本体２である。

【図６】同上の飲料用ポット１の中蓋３の変形例の平面図である。

【図７】同上の飲料用ポット１の中蓋３と外蓋４の一部の拡大平面図であって、（ａ）が外蓋４（図５（ａ）の範囲Ａ－Ａ’間のＡ’’－Ａ’’’）、（ｂ）が中蓋３（図５（ｂ）の範囲Ｂ－Ｂ’間のＢ’’－Ｂ’’’）である。

【図８】同上の飲料用ポット１の外蓋４の変形例を示すものであって、（ａ）が側面図、

（ｂ）が底面図、（ｃ）が周縁の一部の拡大底面図である。
【図９】同上の飲料用ポット１の使用例を示すものであって、コーヒーを淹れた後の外蓋４の裏面の様子を示すものである。
【図１０】本発明の第２の実施形態に係る飲料用ポット５を示すものであって、（ａ）がポット本体２’の平面図、（ｂ）が飲料用ポット５の右側面視断面図である。
【発明を実施するための形態】
【００１２】
以下、本発明を実施するための好ましい形態について図面を参照しながら説明する。本発明の第１の実施形態に係る飲料用ポット１は、図１～図５に示すように、ポット本体２と中蓋３と外蓋４を備えてなる。
【００１３】
ポット本体２は、上方が開口し、その周縁の一部に外方に突出した注ぎ口２１が形成されている。より詳細には、ポット本体２は、飲料用ポット１がテーブルなどに置かれたときに安定するように、その底面の周辺部は平らであり、注ぎ口２１の反対側には外方に突出した取っ手２２が形成されている。ポット本体２の注ぎ口２１の先端部よりも下方の内壁には、中蓋３を載置するための段差部２３が形成されている。注ぎ口２１は、正面視略Ｕ字形状（図１（ａ）参照。）のように上方が空いているものが注ぎ易さや洗浄のし易さの点で好ましい。
【００１４】
中蓋３は、略全体にわたって多数の貫通した第１通液孔３１、３１、…が形成されており（図５（ｂ）参照。）、ポット本体２の注ぎ口２１よりも下方に載置されてポット本体２の開口を塞ぐものである。より詳細には、中蓋３は、略平板状の中蓋基部３ａと、その中心部に上方に突出して形成された突起部３２と、より成り、多数の第１通液孔３１、３１、…が突起部３２の周囲の略全体に形成されている。多数の第１通液孔３１、３１、…は、同じ直径として形成されており、後述のようにコーヒー成分抽出液を注ぎ口２１から流出させるときに、流出が遅くならなく、かつ、コーヒー滓の大部分が中蓋基部３ａにより遮断されるような直径（例えば１．０ｍｍ～１．２ｍｍ程度）となっている。第１通液孔３１、３１、…の直径は、通常、第１通液孔３１、３１、…相互間の距離よりも小さくする。突起部３２の高さは、外蓋４が中蓋３の上に載置されたときに、外蓋４の周縁が中蓋３に接するのに妨げとならないような高さとする。中蓋３は、ポット本体２の段差部２３に載置されることによってポット本体２の開口を塞ぐ。
【００１５】
中蓋３は、図６に示すように、中蓋３がポット本体２に載置されたとき取っ手２２側になる部分に第１通液孔３１、３１、…を形成しないようにすることも可能であるが、ポット本体２に略満杯に湯が注入された場合に取っ手２２側の第１通液孔３１、３１、…から空気を流入させ易い点、及び回転位置合わせが必要ない点で、図５（ｂ）に示すように略全体にわたって形成されているのが好ましい。
【００１６】
外蓋４は、大略椀状をなし、ポット本体２に載置された中蓋３上に更に載置されてこれを覆うものであって、そのように載置されたとき注ぎ口２１側になる部分に多数の貫通した第２通液孔４１、４１、…が形成されている。この第２通液孔４１、４１、…は、図７に示すように、中蓋３の第１通液孔３１、３１、…よりも直径が小さい。また、外蓋４は、中蓋３の上に載置されたときにそれらの間に空間を形成するようになっている。
【００１７】
より詳細には、外蓋４は、中蓋３に周縁が接することができるように大略椀状をなす外蓋基部４ａと、その中心部に上方に突出して形成された突起部４２と、より成り、多数の第２通液孔４１、４１、…が注ぎ口２１側に位置し得るように形成されている。多数の第２通液孔４１、４１、…は、同じ直径として形成されており、後述のようにコーヒー成分抽出液を注ぎ口２１から流出させるときに、中蓋３の多数の第１通液孔３１、３１、…を通過したコーヒー成分抽出液に分散して混じっている少量のコーヒー滓がほとんど外蓋基

部４ａにより遮断されるような直径（例えば０．８ｍｍ程度）となっている。また、そのときに、コーヒー成分抽出液がスムーズに流出するように、全体の約半分程度の範囲に第２通液孔４１、４１、…が多数形成されている。

【００１８】

外蓋基部４ａは、中蓋３の間に空間を形成するよう中心部に近付くにつれて上方に湾曲することにより大略椀状をなしている。また、外蓋基部４ａの第２通液孔４１、４１、…が形成されていない部分には、空気孔４３が形成されている。この空気孔４３は、通常、使用時にはコーヒー成分抽出液が到達することはないので、第２通液孔４１よりも大きい直径であり、また、１個に限ることなく複数にすることが可能である。このように、外蓋４（外蓋基部４ａ）が大略椀状をなしているので、第２通液孔４１、４１、…を多数形成できる上に、空気孔４３も形成可能になっている。

【００１９】

突起部４２は、その上面を平らにして、ひっくり返してテーブルなどに置くことができるようにするのが好ましい。その状態で、ポット本体２から取り外した中蓋３を上に（外蓋４の底面上に）載置できるので、衛生的である。

【００２０】

また、外蓋４は、図８に示すように、ポット本体２と中蓋３上に載置されたとき注ぎ口２１側になる周縁（外蓋基部４ａの周縁）に複数の切欠き４４、４４、…を形成することも可能である。このようにすると、後述のようにコーヒー成分抽出液を注ぎ口２１から流出させるときに、外蓋４と中蓋３の間に形成された空間に溜まったコーヒー成分抽出液を複数の切欠き４４、４４、…から流出させて、外蓋４が水圧により不如意に持ち上がるのを抑止することができる。切欠き４４、４４、…は、コーヒー滓が流出しない大きさとする。

【００２１】

ポット本体２と中蓋３と外蓋４は、陶磁器製であるのが好ましい。陶磁器製であると、断熱性に優れた材料を用いることができるため、コーヒー成分抽出の待機の期間などにポット本体２に注いだ湯が冷めにくくすることができ、また、製法上、第１通液孔３１や第２通液孔４１を形成するのが容易である。また、金属やプラスチックを用いる必要がないので、金属アレルギーや化学物質アレルギーの人或いはそれらに敏感な人にとっては非常に有用なものとなる。なお、ここで陶磁器製とはセラミック製をも含む。

【００２２】

このような飲料用ポット１は、以下のようにして使用することができる。先ず、外蓋４と中蓋３をそれぞれの突起部４２、３２を持ってポット本体２から取り外し、ポット本体２にコーヒー粉を入れ、湯を注入する。そして、中蓋３をポット本体２の段差部２３に載置し、外蓋４をその周縁を中蓋３に接しさせて中蓋３上に載置する。コーヒー粉の成分が湯、すなわちコーヒー成分抽出液の中に抽出されるので、それが適当な濃度になるまで待機する。好ましくは、この待機時間の途中に、コーヒー成分抽出液をかき廻して表面付近に浮き上がったコーヒー滓の軽いものを沈める。この場合、沈んだコーヒー滓の軽いものは、時間が経つと再度浮き上がるので、浮き上がる前（例えば、かき廻してから３０秒～６０秒程度経つ前）に次に述べるようなカップにコーヒー成分抽出液を注ぐ工程にはいることになる。

【００２３】

この待機時間の後、取っ手２２を持ち、外蓋４の突起部４２を手で押さえて外蓋４を中蓋に、中蓋３をポット本体２（段差部２３）にそれぞれ密着させ、飲料用ポット１をカップに向けて傾ける。そうすると、ポット本体２の中のコーヒー成分抽出液は、中蓋３の多数の第１通液孔３１、３１、…を適度な速度で通過する。このとき、コーヒー成分抽出液に分散して混じっていたコーヒー滓の大部分は中蓋３に遮断される。注ぎ口２１側の第１通液孔３１、３１、…は、次第にコーヒー滓により塞がれていき、塞がれた以外の第１通液孔３１、３１、…をコーヒー成分抽出液が通過するようになる。コーヒー成分抽出液が通過しない第１通液孔３１、３１、…は、ポット本体２の中で流出するコーヒー成分抽出

液に入れ替わる空気の供給孔となる。
【００２４】
中蓋３の多数の第１通液孔３１、３１、…を通過したコーヒー成分抽出液は、外蓋４と中蓋３の間に形成された空間に溜まりながら、外蓋４の多数の第２通液孔４１、４１、…を通過して流出する。このとき、中蓋３の多数の第１通液孔３１、３１、…を通過したコーヒー成分抽出液には、少量のコーヒー滓が分散して混じっており、それらのほとんどは、外蓋４に遮断されることになる。また、混じっているコーヒー滓が少量であるので、第２通液孔４１、４１、…の大部分が塞がれてコーヒー成分抽出液の流出速度が遅くなることはなく、また、その結果、コーヒー成分抽出液が濃くなって苦くなることもない。外蓋４の多数の第２通液孔４１、４１、…から流出したコーヒー成分抽出液は、外蓋４の外面を伝い、そして外蓋４の外面とポット本体２の内壁により誘導されて、注ぎ口２１に向かって流れて行く。
【００２５】
このようにして、容易かつ迅速に、コーヒー滓の混入が極めて少ないコーヒー成分抽出液を注ぎ口２１から流出させることができる。使用後の飲料用ポット１は、ポット本体２と中蓋３と外蓋４を分離して洗浄する。第１通液孔３１、３１、…と第２通液孔４１、４１、…に詰まったコーヒー滓は水道栓からの水圧により取り除くことができ、また、飲料用ポット１には人間の手や洗浄具が届きにくい箇所はないので、非常に簡単に洗浄でき、衛生的である。また、飲料用ポット１の構成は簡単で、かつ、摺動などする部分がないため、劣化はほとんどないようにすることができる。
【００２６】
使用例として、図９に、第１通液孔３１、３１、…の直径が１．２ｍｍ程度、第２通液孔４１、４１、…の直径が０．８ｍｍ程度であり、外蓋４には切欠き４４、４４、…が形成された飲料用ポット１を用い、コーヒー粉としてスプーン４杯分の粗挽きを用いたときのコーヒーを淹れた後の外蓋４の裏面の様子を示している。このように、中蓋３の第１通液孔３１、３１、…を通過したときにコーヒー成分抽出液に混じっていたコーヒー滓が外蓋４により十分に遮断されており、注ぎ口２１からはコーヒー滓の混入が極めて少ないコーヒー成分抽出液を得ることができた。
【００２７】
次に、本発明の第２の実施形態に係る飲料用ポット５について説明する。この飲料用ポット５は、図１０（ｂ）に示すように、ポット本体２’と外蓋４を備えてなる。ポット本体２’には、上述の飲料用ポット１を構成していた中蓋３に代えて、障壁部２４が設けられている。外蓋４は、飲料用ポット１を構成していた外蓋４と同様のものである。従って、飲料用ポット５全体の外観は、飲料用ポット１と同様、すなわち図１（ａ）の正面図、図１（ｂ）の右側面図、図２（ａ）の平面図と同様である。また、外蓋４の外観は、図３（ａ）の正面図、図４（ａ）の右側面図と同様である。
【００２８】
より詳細には、ポット本体２’は、ポット本体２と同様の注ぎ口２１と取っ手２２が形成されている。また、ポット本体２’の上記障壁部２４は、飲料用ポット１の中蓋３及びポット本体２の段差部２３のかわりに、注ぎ口２１の先端部よりも下方の内壁に、ポット本体２’の一部として形成されている。障壁部２４は、取っ手２２側に、それを通してコーヒー粉を入れ湯を注入することができる大孔２５が形成されており、この大孔２５よりも注ぎ口２１側に、上記中蓋３の第１通液孔３１、３１、…と同様な第１通液孔２６、２６、…が形成されている（図１０（ａ）参照）。
【００２９】
この飲料用ポット５は、中蓋３を用いないので、飲料用ポット１よりも洗浄や保管がし易い。但し、ポット本体２’に略満杯に湯が注入された場合などに、大孔２５をコーヒー成分抽出液が通過しないようにしてカップに注ぐ必要がある。
【００３０】
以上、本発明の実施形態である飲料用ポット１について説明したが、本発明は、実施形

態に記載したものに限られることなく、特許請求の範囲に記載した事項の範囲内でのさまざまな設計変更が可能である。例えば、第１通液孔３１（又は２６）と第２通液孔４１の直径は、適切なコーヒー成分抽出液が得られるように、適宜、設計変更することが可能である。

【００３１】

また、本発明の飲料用ポットをコーヒーのみならず、他の飲料に流用することは任意であり、そのために適宜、設計変更することも可能である。例えば、紅茶用や緑茶用などに流用できるのは勿論であるが、それらを氷で冷やす場合に非常に有効である。この場合、茶葉を入れ、湯又は水を注入した飲料用ポット１（又は５）に氷を入れる。そして、茶葉及び氷を中蓋３（又は障壁部２４）で遮断して、茶成分抽出液をカップに注ぐ。ここで、茶葉及び氷を中蓋３で遮断して茶成分抽出液を一気に注ぐことができる点で、飲料用ポット１の方が特に好ましい。

【符号の説明】

【００３２】

１、５　飲料用ポット
２　ポット本体
２１　注ぎ口
２４　障壁部
３　中蓋
３１、２６　第１通液孔
４　外蓋
４１　第２通液孔
４４　外蓋４の切欠き